

柿もぎ

三年 本間 雄介（平成四年度）

ある日曜日、ぼくは、母や弟といっしょに柿もぎに行つた。車で、今年できたばかりの、農業用道路を通つて、電報電話局の横に車をとめた。そこから坂を下つて二分ほどのところに、ぼくの家の畑はある。もう秋も半ばなので、ほとんどの畑は、土だけが見えていた。でも、柿の木はおいしそうなお実をつけて、地面にしつかりと立っていた。おいしそうに見える、つい食べてしまいたくなる。しかし、こう思うと、数年前のあのいまわしき事件を思い出す。そのころ、ぼくは、秋のくだものといったらとにかく柿と思うほど、柿が好きだった。でも、柿は熟れないと食べることができないことを知らなかった。母と祖母が畑に柿もぎにいくのに、ちやつかりついでに行ったことがあった。とりたての柿を食べようとしていったわけだった。柿が入っているかごから、一個くすねて食べてみた。本当にしぶかった。今となつては、なんてあんなことをしてしまつたんだろうと思う。

ぼくの家の畑には、三本の柿の木があつて二本の木には、横から見るとだ円形をした、一般的に、柿といわれてイメーシングするような柿の実がなり、そして、残りの一本には

『大和柿』というけつのとつぱつた柿の実がなります。最初に『大和柿』の実をもいだ。重さは、ふつうの柿の一・七五倍ぐらいだった。外側から見ると、枝に三十から四十個ぐらいついているように見えるけど、実際にもいでみると五十個ぐらい枝についているのが内側から見るとわかつた。そのうち三十個ぐらいがはどよく色づいていた。残りは、からすにつつつかれるか、まだ緑色かのどちらかだつた。しかし、ぼくは、あまり大和柿は好きじゃないので、少ししかとれなくてもよかつた。なぜ好きじゃないかというと、ほし柿にしたりすることが多いからだ。ぼくは、柿の歯ごたえのあることが好きなので、ぼくは、大和柿は好きじゃない。大和柿は、その重さのためか、枝がたれ下がっているので、手でも簡単にとることができけれど、ふつうの柿の木は、高い所に実がなつていて高枝切りばさみがないと、実をとることができない。だから、母は、高枝切りばさみを使って柿をとろうとしていた。しかし、あいにくぼくの母は、身長一四〇センチ程度なので、高い方のえだの実がとれない。それで、ぼくが、高枝切りばさみを使って柿をとることになった。ぼくは、母より、三十センチは身長が高いので、きれいに柿をとることができた。『〇〇と『サミは使いやすい』とはよく言ったものである。ふつうの柿の方は、だいたいほどよい色あいになつていたので、ほとんど実をとりつくしてしまい、もう葉っぱだけに近い状態になつてしまつていた。ぼくは、ふつうの柿

は焼酎につけて熟らせてから食べるのも、ほし柿にして食べるのも好きなので、いっばいとれてよかったと思う。いっばいとったのはよかったけど、運ぶのに時間かかかり、畑から車まで十分ぐらいかかってしまった。結局弟は、なんにも役に立たなかった上に、はしゃいでいるものだから、じやまになつてばかりだった。ぼくと母は、とった柿をかごに入れてしよつて車のところまで行った。重さは結構あつて、ビールの箱ぐらいになった。でも、どうにか車まで運んだ。高枝切りはさみなどの道具もすべて車の後ろに積んで車に乗った。ちよつと雑音の多いラジオをききながら、ぼくは。「はえぐ柿食いつでちや。」などとぼやきながら家についた。秋のくだもの、くり、柿、なしのうち、柿をもうすぐ食べる事ができそうに楽しんだ。ちなみに残りの二つはもう食べた。